

コロナ禍における各県の教育委員会が実施した 海外留学創出に繋がる先進的な取組み事例について

文部科学省官民協働海外留学創出プロジェクトチーム

はじめに

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大に伴い、3月以降、国を越える人の移動が規制され、国内では、感染者拡大の抑制を目的としたさまざまな制約がかかる中で、大人数での集会やイベントの実施が困難な状況であった2020年度は、学校を始めとする教育や研究、交流などの分野にも甚大な影響が及び、県や学校が従来から実施している国際交流や留学促進に繋がる諸事業には、中止や計画の見直しが迫られる1年になりました。

しかしながら、各方面の制限に対するさまざまな配慮や工夫、急速かつ広範に広がったオンライン会議システムならびに地域に存在する人的資源を有効に活用することによって、海外留学創出に繋がる国際交流プログラムの企画に対する経験知を持たない、あるいは少ないプレイヤーが現地への訪問や留学に代わる新しい取組みを発想する起点にもなり、これまでの国際交流の形を大きく変えました。特に、ICTを活用したオンラインプログラムの実施については、PC端末とネット環境が整えば、どこにいてもプログラムに参加できる気軽さや、運営側にとっても移動に係る時間的な労力やそれに伴う費用、オペレーション上のメリットも判り、結果として、国際交流の機会を提供できる学生を増やせた事例もあります。

本稿では、従来の対面型の国際交流・留学の事業をオンラインでの運営を主にした方法での実施に置き換え、コロナ禍であっても青少年が世界との繋がりを維持し、発展させていくための先進的な事例として、徳島県教育委員会ならびに北海道教育庁の取組みを紹介します。

1. オンライン・オフラインを活用した ハイブリッド型の取組み 「徳島グローバルキャンプwith 英語発信トレーニング講座」(徳島県 教育委員会)

徳島県では、2013年に開始した英語による交流合宿「徳島サマースクール」を見直し、2019年から年2回(8月)、県内で1週間程度の通学型、および合宿型で英語漬けの体験学習をする「徳島グローバルキャンプ」事業を開始しています。新プログラム初年度の2019年度には80人の応募があり、参加者は、アクティブラーニングと生活を共にする時間の中で、海外から招いた外国人学生たちと国際交流を図ると共に、異文化への理解や参加者同士の友好も深めました。

一方、2回目の開催に向けた準備が始まる昨春は、4月に、新型コロナ感染の広がりに伴う緊急事態宣言が初めて発出され、日々の生活のさまざまな場面に制限がかかり、学校も一斉休校となりました。

「休校の状態が続く状況下で、2020年の夏休みが例年よりも短くなることを想定し、5月の時点で、8月の開催を予定していた宿泊型のキャンプは現実的ではないと判断し、まずは、開催時期を秋に切り替える措置を取りました。その頃は、徳島県は他県に比べると、コロナウイルス感染者がまだ非常に少なかったこともあり、キャンプに盛り込むプログラムすべてが県内で完結する内容にすれば、キャンプそのものを中止せずに実施が可能なのではないかとも考え、秋の実施に向けてプログラムをどのように再編成したらよいかについての検討を開始し、参加者募集も県内の感染状況をみながら9月に開始しようということになりました。」(徳島県教育委員会 グローバル・文化教育課グローバル人材育成担当 班長 大久保民枝さん)

プログラム再編成上での具体的な検討事項は、以下の通り。

- ・開催地および全プログラムを県内に集約
- ・宿泊型ではなく、通学型に
- ・オンラインを中心にしたオンラインとオフラインのハイブリッド型
- ・オフラインで交流するプログラムに招聘する外国人留学生は県内の大学に在籍する人に限定する
- ・オンラインプログラム中に実施する小グループごとの活動をふまえ、各々のグループの音声の入り交じりやハウリングを避けられる広い場所の確保と機器の調整が必要

オンラインプログラムの運営については、ノウハウを持つ外部機関に委託し、ネットワーク環境担当者を常駐させたシステム管理も工夫のポイントです。

「参加者がこのキャンプを通じ、自分自身の未来について考えたことをひとりひとり発表させる時間もつくりました。このキャンプの体験が、ひとりひとりにとって、今後の高校生活を送る上での指針を得るものになってくれればという期待を込めました。」(大久保さん)

これらの入念な配慮と検討に基づき、決まったキャンプは、以下の通り。

2020年度「徳島グローバルキャンプ with 英語発信トレーニング講座」

期間：2020年10月25日(日)、11月15日(日)

12月26日(土)～12月28日(月)計5日

プログラムの内容：

〔英語発信トレーニング講座〕

第1回 講義：「英語通訳案内について」

実践：徳島の観光地とアイテムの紹介

第2回 講義：「四国遍路の魅力」

実践：ALTとともに歩き遍路体験

〔徳島グローバルキャンプ〕

(1) 外国人大学生をリーダーに、小グループ単位で、テーマに沿った意見交換やプレゼンテーションをするアクティブラーニング

(2) グローバルな活動経験を持つ社会人との座談会

(3) 県内の大学に在籍する留学生と共に県の魅力を再発見する文化体験活動

〔募集人員〕40名



提供：徳島県教育委員会
オンラインで外国人大学生リーダーとグループワーク

(1) では、“Don’t be shy.”、“Don’t leave anyone behind.”、“Mistakes are OK.”をルールのもとで、「フラッグ(旗)」をキーワードとしたグループワークを実施しました。まず、導入プログラム「Explore the World」では、外国人留学生の出身国の国旗のデザインに込められた意味や文化、生活に関するプレゼンテーションをもとに話し合い、次のプログラム「Opinion Exchange」で、参加者同士がどんな世界が理想なのだろうかについて考え、続く「Flag Making & Group Presentation」で、思いを表現したオリジナルフラッグを作成し、実現のためのアクションプランをグループごとに英語で全体発表をする流れをとりました。



提供：徳島県教育委員会
出身国について紹介する留学生の話に聞き入る生徒たち

オフラインでおこなったプログラムとして、(2)では、人形浄瑠璃の分野で活躍している県内在住のアメリカ人と、アフリカで活動経験のあるJICAの国際交流員の方を招き、それぞれと対話をする体験を、(3)では、密にならないような配慮を十分にしつつ、事前に講義の中で地元徳島の魅

力やお遍路や阿波踊りのことを英語でどう説明したらよいのかについて学び、留学生と共に訪問した阿波踊り会館で、実際に阿波踊りを踊りました。



提供：徳島県教育委員会
県内の大学の留学生と遍路体験

参加した生徒たちの反応は、運営者の予想を上回る良好なもので、キャンプに対する満足度の高さが確認できた一方、運営側のふりかえりとしては、オンラインプログラムの場合、「空気感」が生まれ難い状況ゆえに、英語がわからないことを画面の向こう側の留学生に伝わらないコミュニケーションの難しさもあり、ファシリテーターを各グループに入れておく必要性や、ある程度の大人のサポートについても今後の検討する余地がありそうだという感想が出ています。特に、前年までのような「生活を共にする」宿泊型キャンプとの比較では、その場に参加している生徒同士の関わ

りがどうしても希薄になってしまうため、その補完をするためにも、オンラインだからこそできることやオンラインならではの利点や特徴をより活かせるプログラムの開発が今後の課題として挙がっています。

本年度も8月に、SDGsをテーマに据え、海外に住む学生と繋ぐオンラインプログラムとオフラインプログラムを組み合わせたハイブリッド型キャンプ（5日間を予定）を再度開催する予定があり、更なる内容の充実を期待しています。

2. 相互派遣型ホームステイプログラムをオンラインによる交流に代替 「北海道／カナダ・アルバータ州高校生交換留学促進事業」 (北海道教育庁学校教育局高校教育課)

北海道教育委員会は、1994年より、姉妹都市提携を結んでいるカナダ・アルバータ州の教育省との共催で、それぞれの地域在住の高校生10名をペアにし、お互いの家で2か月間ずつホームステイをしながら、パートナーの学校に通学し、授業や学校行事等を体験するプログラムを実施しています。このプログラムでは、まず、アルバータ州の高校生が8月に来日、北海道に2か月滞在した後、11月からの2か月間は、北海道の高校生がアルバータ州を訪問します。ホームステイ受入れ中に掛かるアルバータ州留学生の食費等の生活費や通学費は参加者家庭の負担になるかわりに、留学中に掛かる同様の経費はアルバータ州のホストファミリーが負担し、相殺になる他、国際線の往復航空運賃を対象に最大10万円まで補助金を交付するため、道内では、「参加しやすい」留学プログラムとして好評です。

対象は北海道立高等学校の1、2年生あるいは中等教育学校の4、5年生。事業開始以来、26年間に70校から208名もの高校生に留学の機会を創出してきました。

「私たち北海道教育庁は、例年通り、2月には夏からの対面交流を前提に、この事業に対する参加者募集ならびにアルバータ州教育省とのコミュニケーションを開始しました。しかしながら、コロナ禍の影響は深刻化していく状況だったため、3月上旬に、アルバータ州教育省に対し、留学期間の短縮及び実施時期の延期を申し入れました。北海道側からオンラインによる交流の可否を打診したのは6

	8/3 (水)	8/4 (木)	8/5 (金)	8/6 (土)	8/7 (日)
9:30~10:20	オープニング セレモニー	オンラインワークショップ			鳴門教育大学の 留学生と 異文化交流
10:30~11:20	ALTと 異文化交流	海外の学生と SDGsをテーマに 意見交換や グループワーク			鳴門教育大学の 留学生と SDGsについて 意見交換
11:30~12:20	ALTと 異文化交流と 自然体験	伝統 文化 体験	座談会 国際社会で 活躍する 講師を 囲んで	オンライン ワーク ショップの ふり返りと まとめ	プレゼンテーション 準備
13:30~14:20	「渦の道」				クロージング セレモニー
14:30~15:20	ALTと 文化体験	英語で 人形劇を 学ぶ			
15:30~16:20	大塚国際美術館				

【図1】本年度実施予定の徳島グローバルキャンプ募集要項をもとに作成

月中旬でしたが、最終的には、8月27日にアルバータ州教育省が発表したコロナ禍における学校運営のガイドライン「スクール・リエントリープラン」で、国際教育プログラムに関する規定が示され、事実上、今年度の対面での交換留学が実施できない見通しとなったため、オンラインでの交流に切り替えるということで、アルバータ州教育省と合意に至りました。

アルバータ州との交換留学事業は、道立高校の教員や生徒の認知度が高く、参加を希望する生徒が少なくないことを知っていたので、コロナ禍の状況においても、早期に中止を決定するのではなく、実施に向けて粘り強く取り組む必要があると考えていました。また、2020年はアルバータ州との姉妹提携40周年という節目の年でもありました。この事業の継続を止めずに両地域の交流をさらに発展させるという目標をアルバータ州教育省と共有できたことがオンライン交流の実現につながったのだと思います。」(北海道教育庁 高校教育課 主査 田原勇人さん)

メールやビデオ会議での協議を重ね、大枠として纏まった運営方法および内容は、両地域の高校生をペアにし、それぞれ4週間を1単位とするホスト期間とゲスト期間を設定、平日1回(15分)、週末1回(30分)の週2回、合計16回オンラインで繋がり、学校や家庭生活、趣味、文化、社会問題について話し合う形で交流を図るといったもの。使用する言語は英語および日本語で、基本的にはホスト側の母語を主たる交流言語とする、交流タイムは平日、週末共、日本時間の9:00～12:00(カナダ時間17:00～20:00)、毎回のテーマは交流タイムの終盤に、アルバータ州教育省と協力して作成したテーマリストの中から次回の話題をどれにしようかと相談させる形をとり、コミュニケーションの活性化を図りました。これらの条件を纏め、実施要項に基づき、書類審査や面接選考を行い、最終的に9名の生徒の参加を決定しました。

【令和2年度高校生交換留学促進事業に係るオンライン交流プログラム実施要項】

1. 目的：カナダ・アルバータ州の高校生とオンラインで交流することにより、本道の高校生の英語力の向上を図るとともに、国際的視野を持った生徒を育成し、あわせて、道・州間の友好と親善に資するものとする。
2. 実施期間：第一期2020年11月中旬～12月中旬

- 第二期2021年1月下旬～2月下旬
3. 実施回数及び実施時間：週2回(平日15分、週末30分)
4. 実施時間帯：日本時間9時～12時
(カナダ・アルバータ州の17時～20時)
5. 使用言語 英語及び日本語(第1期ホストは北海道側、第2期ホストはアルバータ州側とする。)

〔スケジュール〕

～8月中旬	学校を通じて参加希望者を募集
8月下旬	各管内教育局による面接選考
11月上旬	参加決定通知
11月14日～15日	オンライン事前交流会
11月中旬～12月中旬	オンライン交流 第1期
1月下旬～2月下旬	オンライン交流 第2期

【図2】北海道教育委員会 HP 内「令和2年度高校生交換留学促進事業に係るオンライン交流プログラム実施要項」を元に筆者が作成

プログラム運営上のさまざまな工夫の内、特に注目したいのは、これまでの交換留学事業の流れを汲み、ひとつひとつのプログラムを「日本語版」と「英語版」の設定とし、すべての参加者が留学生の受入れをする「ホスト」としての立場も、派遣留学生として現地を訪問する「ゲスト」としての立場も疑似体験できるユニークなしくみになっている点です。

〔各回の交流テーマ〕

第一期：ホスト / 日本、使用主言語 / 日本語

第1週	11/16～	〔日本の学校生活〕 時程、通学方法、科目、校則、行事、課外活動
第2週	11/23～	〔日本の家庭生活〕 家族の紹介、ペット、食事、家事、家族との時間
第3週	11/30～	〔生徒の地元〕 大きさ、有名なもの、親しまれている活動、祭りや行事
第4週	12/7～	興味・関心のあるテーマや特定分野のテーマなど

第二期：ホスト / カナダ、使用主言語 / 英語

第1週	1/25～	〔アルバータの学校生活〕 時程、通学方法、科目、校則、行事、課外活動
第2週	2/1～	〔アルバータの家庭生活〕 家族の紹介、ペット、食事、家事、家族との時間
第3週	2/8～	〔生徒の地元〕 大きさ、有名なもの、親しまれている活動、祭りや行事
第4週	2/15～	興味・関心のあるテーマや特定分野のテーマなど

【図3】北海道教育委員会 HP 内「令和2年度高校生交換留学促進事業に係るオンライン交流プログラム実施要項」を元に筆者が作成

前述のように、本事業は全期間を2期に分け、ホスト側とゲスト側がどちらになるのかを事前に決めており、図3で示すように、各交流回で話し合うテーマについてもその場でお互いの国の場合を話し合うのではなく、常にホスト側の国の場合を取り上げるため、ひとりの参加者から見ると、同じ内容について、主に自分のことを紹介する(話す)体験と、相手のことを知る(聞く)体験をすることになります。

加えて、道教委とアルバータ州教育省の本件担当者がファシリテーターとなり、ペアになる生徒たちの初回交流の前におこなった事前交流会の実施も注目すべき工夫です。この交流会は、9組それぞれのペアに対し、15分程度の時間を設定し、円滑な交流ができるよう、生徒たちの不安や緊張の緩和をする機会という位置づけとなっています。事前に全体の進行や使用する言語、事前に話す順番を決めておく等、短い時間の中で主たる活動に割り当てる時間を最大限に使い、進行の流れも途切れないような準備や、ゲームをするアイスブレイクの実施をファシリテーターが主導するなどの細やかな配慮がありました。

時間	使用言語	内容
1分	英	通信状態の確認、参加者の確認
1分	英	主催者挨拶(道教委、ア州教育省)及び趣旨説明
2分	日英	【自己紹介】(北海道生徒→アルバータ州生徒の順で) 名前、学校、居住地、応募理由、 交流を通して高めたいスキルを話す
4分	日英	【アイスブレイク1 (Word Chain)】 ・活動の説明 ・デモンストレーション(運営者) ※2回実施(1回目は日本語、2回目は英語)
4分	日英	【アイスブレイク2 (Witness)】 ・活動の説明 ・デモンストレーション(運営者) ※2回実施 (1回目の出題は日本、2回目はカナダから)
6分	日英	【プレゼンテーション「私の好きなこと」】時間：1人2分以内 ・発表方法：発表者は母国語でプレゼン、 終了後、パートナーが相手の言語で質問、 運営者が母語で質問。 ・準備：スライド、パフォーマンスをする場合は必要な物品等 ・発表順：アルバータ州生徒→北海道生徒
1分	日英	【挨拶】1回目の交流日時の確認と挨拶

【図4】事前交流会の運営進行表
北海道教育委員会HP内「令和2年度高校生交換留学促進事業に係るオンライン交流プログラム実施要項」を元に筆者が作成

その他、北海道の生徒たちに対し、学校での交流時には、学校の様子や施設を画面で紹介をするよう促したこと、家での交流の際には、家族にも可能な範囲で加わって頂けるような協力依頼も図り、バーチャルなホームステイや学

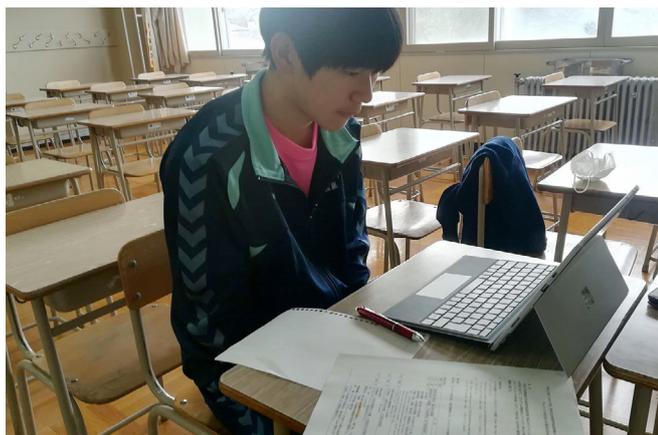
校訪問の雰囲気や伝わるよう配慮をしたこと、交流タイム中に不具合等があった場合にいつでもサポートに入れる備えとして、各ペアが交流を図るビデオ会議のオンラインアドレスを運営側が集約し、学校と連携を図っておく一方、事前交流会以降の交流タイムでは、生徒たちがリラックスした状態で対話ができることを最優先に、不要な介入はしないというスタンスをとったことも参考にしたいポイントです。参加した9名の生徒の中には、日本の友達を伴ってオンラインに入り、友好の輪を拡げていたケースもあり、自由な交流を大いに楽しんでいました。



提供：北海道教育庁学校教育局高校教育課

事業実施後のアンケートでは、参加した9名全員が「英語力が向上した」、「パートナーとの交流を今後も続けたい」、「パートナーの住む地域に対する理解が深まった」と回答、これらの結果は、現地を訪問あるいは受入れをする対面交流が困難な状況であっても、オンライン交流には自身の成長を感じ、カナダや異文化への関心および留学意欲の向上に繋がる体験の創出が可能であることを示しているといえましょう。

一方、「毎回の時間設定の長さが短かった」、「もっと長く繋がりがかった」という意見や、第二期の開催期にコロナの関係で変更になった期末考査の時期が重なり、日本の生徒にとってはこの両立が負担になったという報告、両国間の時差から日本の日中とカナダの夜間の設定での交流になったため、日本の生徒の平日は学校から、週末は家から交流する状況であったことに対し、カナダの生徒は常に家庭からのアクセスだったために、日本の生徒からは「カナダの学校を見てみたかった」という声も挙がっています。



提供：北海道教育庁学校教育局高校教育課



北海道教育委員会 HP
高校生交換留学促進事業：カナダ・アルバータ州↓

文部科学省では、全国のオンライン国際交流事例を収集し、文部科学省公式サイトに公表しています。ここに紹介した2例の他、SDGsに関する議論や発展途上国支援につながる取組み、文部科学省事業「アジア高校生架け橋プロジェクト」の招聘生との来日前からの交流の取組み等、さまざまな特色のある事例を紹介していますのでご高覧ください。



文部科学省 HP：高校生の留学等を通じたグローバル人材育成のための取組→

トビタテ!留学 JAPAN 公式サイト「自治体・教育委員会のみなさまへ」ページでも、全国の留学促進の好事例等関連する情報を閲覧することができます。

